

## 「茶と和菓子文化都市」松江と不昧公

茶を飲みて 道具集めて 蕎麦を食い

庭を作りて 月花見ん その外大望なし 大笑大笑 不昧

恐らく藩主を退いて後の狂歌と思われませんが、一部には現職中だという説もあり、仮にそうならば、なんと太平楽なと思うのは私だけでしょうか？

松平治郷はるさとが松江藩の藩主になったのは十七歳の時（明和四年）、父が藩政の失敗から三十八歳で若隠居したため家督を相続したのですが、当時の松江藩（十八万六千石）は財政が破綻寸前で治郷が藩主としてまず取り組まなければならなかったのは「藩政の抜本改革」でした。

治郷は譜代の家老・朝日丹波とともに藩政改革に取り組み、江戸屋敷の大幅縮小や家臣の役職整理等の過酷ともいえる歳出の見直しにまず着手しました。

また莫大な借金（五十万両余）の利子の免除と元金の七十年分割払いを勝ち取るなど辣腕を振るったのです。更に、これまで「三公七民さんこうしちみん」だった年貢を「四公六民」へ引き上げる荒業も繰り出したので、藩の財政は見事に立ち直りました。

更に積立金（御金蔵御有金）ができるまでに藩は裕福になり、天保の大飢饉も積立金をあてることで最小限の被害で乗り切れたといえます。

他方、新田開発による米の増産や木綿・鉄・高麗人参等を藩の代表的な特産品として育成し専売制にする等の産業政策にも乗り出し積極政策を推進したので、この改革を民衆は「御立派おたてはの改革」と呼んでその功績を讃えたといえます。これだけの業績を上げた松平治郷は名君として大いに評価されて然るべきなのですが、政治家・松平治郷の評価はあまり芳しくありませんでした。

それには訳があります。治郷が改革で貯め込んだ金を湯水のように使って、自分の趣味である「お茶の道具」の中でも天下の名器といわれるものを買ひ漁り再び藩財政を悪化させることになったからです。なかには千五百両（一両三十万円）とすると約四億五千万円）もする茶器もあったといえます。

それだけではありません。当時は江戸相撲のちょうど第一次黄金時代で各藩がこぞって有力力士をお抱えにすることが流行ったのですが、松江藩はひときわ目立つ存在でした。皆さんも史上最強の力士といわれる雷伝らいでんためえもん為衛門の名をご存じでしょうが、雷伝は松江藩のお抱え力士でした。幕内力士の西方の大半が松江藩のお抱え力士だった時期があったといえますから驚きです。治郷が無類の相撲好きで全国から強い力士を集め優遇したのです。

厳しい藩政改革者の冷徹な顔と高額な茶器を買い集め、相撲に多額のお金を注ぐ不味公が同一人物とはとても思われないくらいです。

そのため「財政を再建し裕福になった松江藩が幕府から警戒されないように

わざと道楽者を演じていた」のだという説があるのも無理からぬことでしょう。

ところが、治郷の茶の湯への傾斜は、単なる個人的な趣味や大名の嗜みの域をはるかに超えたもので、独自の「不味流」(不味は茶号)を築き上げるまでに至っているのを見ると、公金を個人の趣味に浪費したことは否定できませんが、不味公の頭の中では決してこの両者は矛盾するものではなく、個人の趣味を藩のアイデンティティーにまで昇華させ、高次元で止揚されていたのではないかと思います。

その証左として、没後二百年余を経た今日、松江の街が拠って立つ基盤は、お茶や和菓子、蕎麦といった不味公ゆかりの文化が中心になっていて、文化都市の名に相応しい凜とした佇まいを現代に伝えているからです。



毎年秋に松江城で開催される「松江城大茶会」は全国三大お茶会の一つに挙げられますが、昨年十月にも第四十二回目の大会が二日間にわたり九つの流派が一堂に集まり挙行されました。松江の「茶の湯」の特徴は決して上層階級だけを対象とするものではなく、幅広い人々に特別な作法にとらわれることなく、日常的に緑茶を飲むと同様に「抹茶」を点

て楽しんでもらう庶民文化のレベルに達していることにあります。

茶の湯といえれば必ず和菓子が出てくるほど、両者は一体となっているものですが、日本三大菓子処といえれば京都・金沢に続いて松江の名が挙げられることは周知のことです。松江の三大銘菓「若草」「山川」「菜種なたねの里」は不昧公好みの代表として今日でも広く愛されています。不昧公は千利休の「侘び茶」の精神を大事にした季節感のある繊細な菓子を好んだのです。

本稿の冒頭にある狂歌は、不昧公が暇つぶしにやりたいことを列挙していますが、その中に「蕎麦」があります。不昧公はかねてより蕎麦好きで有名ですが、蕎麦の持つ素朴さに惹かれ、日本文化に通底する侘わび寂さびの心を感じていたに違いありません。また不昧公は蕎麦を「茶懷石」のメニューに取り入れた最初の人物でもあります。

また、蕎麦をめぐる不昧公のエピソードは自ら書いた「不昧公夜話ふまいこうやわ」にあります。例えば①蕎麦屋の屋台の風鈴の音に誘われて不昧公が独りでそば切りを食べに出かけたことや②徳川御三家（尾張・紀伊・水戸）を江戸屋敷に招待して自ら蕎麦屋の風体をして蕎麦を打ち振舞ったこと等が書かれています。厳密な意味でこれらが事実であったかどうかは不明ですが、不昧公ならやりかねないと思わせる面白さがこの夜話から感じ取れるのです。

不昧公の世界にどっぷり浸り、公お好みの明々庵で「侘び茶と菓子」を嗜み、

叶うならば「蕎麦懐石」もお相伴あずに与かつて、静かな時の流れに身を置く。そんなこの上ない贅沢を一度味わってみたいという誘惑に駆られるこの頃です。

かつて若き日に、松江大橋の上から、魂が吸い取られてしまうような感動に包まれながら眺めた宍道湖しんじこに沈む夕日の記憶が、今改めて鮮やかに蘇ってくるのです。